

4 果 樹

項 目	作 業 内 容
<p>(1) 低温と寒風対策</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○低温と寒風対策 ○中晩柑類の収穫 ○中晩柑類の予措、貯蔵 ○落葉果樹の整枝・せん定、キウイフルーツの接ぎ木 <p>1か月予報によると、期間の前半は気温がかなり低くなる見込みである（高松地方気象台12月22日発表）。</p> <p>また、かんきつは葉中に多くの貯蔵養分を蓄えているため、冬季の落葉は花芽量を減少させたり、弱い枝や花となって高品質な果実生産を妨げる原因となる。風による落葉は、風速が7～8mを超えると急激に増加するため、気象に注意して対応を行う。</p> <p>ア 気象に対応した収穫</p> <p>寒害の少ない島しょ部地域等では、かんきつを樹上にできるだけ遅くまで成らせることで品質向上を図ることができる。</p> <p>一般的に、かんきつ類は-3℃以下が6時間以上続くと障害果が発生する可能性が高くなる。積雪や低温の恐れがある場合は、急いで収穫し被害の回避に努める。</p> <p>イ 区分採取、区分貯蔵・厳選出荷</p> <p>積雪や低温等で果実に果皮障害や凍害が発生した園では区分採取、区分貯蔵を行う。収穫した果実は減量歩合5%強で予措し、腐敗等が予想される果実は取り除く。</p> <p>ウ 貯蔵果実の保護</p> <p>軒下といった外気の影響を受けやすい場所で予措する場合、寒波襲来前に屋内に搬入する。もし搬入が困難であればシート等で覆う。</p> <p>エ 防寒、防風対策</p> <p>積雪や強風による枝裂けを防ぐため、高接ぎ樹や幼木には支柱を立てて結束し、補強する。特に、幼木や樹勢の弱い樹は寒風被害を受けやすいので、不織布や10mmメッシュ以下程度の防風ネット、サニーセブン等で直接樹体を覆う。風の当たる側だけの対策でも効果は大きい。</p> <p>オ 施設の積雪対策</p> <p>保温効果を高めるため、被覆資材の破れや隙間部を点検し、補修やバンドの締直しなどを行う。また、積雪に備えてパイプや支柱を点検し、必要ならば補強する。積雪の際は、施設への負</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(2) 中晩柑類の収穫</p>	<p>担を考え早めに雪下ろしする。加温施設は、暖房してハウス内の温度を上げることで融雪を促す。</p> <p>ア 「伊予柑」 「伊予柑」の収穫は先月から始まっているが、1月まで樹に成らせておくと完全着色となり、品質も向上する。収穫後は、大玉果、小玉果の選果を行う。3 L以上の大玉は、す上がりしやすいので早めに出荷する。また、果皮障害果（写真1）は必ず区別する。</p>  <p>写真1 「伊予柑」の果皮障害果</p> <p>イ 「不知火」 「不知火」は樹上に置くほど糖度が上昇し、品質が向上する。果皮が完全に着色し、やや赤味を帯びる1月中旬以降が収穫適期である。収穫は、果実糖度とクエン酸を確認しながら各地域の採収基準で行う。 「不知火」は果皮が弱いため、収穫時は果実を丁寧に扱うとともに、ハサミ傷を付けないようにする。</p> <p>ウ 「ぽんかん」 早生「ぽんかん」の収穫は1月上旬までを目安とし、晩生は1月中を目安とする。収穫時期は果実の糖度とクエン酸を確認してから決め、未熟な果実の早採りに十分注意する。</p> <p>エ 「甘平」 「甘平」の収穫時期は、1月上旬頃の果実分析によって判断する（早期に収穫すると、糖度が十分に上がらず酸高も懸念される）。また、果梗部周辺に着色遅延がみられるが、その程度が大きいほど糖度が低い傾向にあるため、早採りは慎む。</p>
<p>(3) 中晩柑類の予措、貯蔵</p>	<p>中晩柑類の予措、貯蔵は、果実品質を左右する重要な技術であり、丁寧な温湿度管理が必要である。品種によって、貯蔵に適した温度や湿度が異なるので次ページの表を参照する。</p> <p>果皮の弱い果実は貯蔵中の過湿（結露等）に留意し、庫内の換気を徹底する。腐敗や傷害等が発生した果実は、見つけ次第取り除く。</p>

項 目	作 業 内 容																											
<p>(4) 落葉果樹の整枝・せん定、キウイフルーツの接ぎ木</p>	<p>ア 「伊予柑」 「伊予柑」は、適正入庫量 (0.8～1.0 t/3.3 m³) を厳守し、無理な貯蔵を行わない。庫内が高温多湿になるとへた落ち、軸腐病、黒腐病が多くなるため、貯蔵中は天井や壁が結露しないよう定期的に換気するとともに、換気扇等で庫内空気を循環させる。</p> <p>イ 「不知火」 「不知火」の予措は、風通しの良い倉庫の軒下や開放した貯蔵庫で3～5%を目安(20～30日)に行う。貯蔵形態には新聞包装、ポリ個装などがあるが、「長期貯蔵ではポリ個装」にするなど、出荷時期や果実品質に応じて使い分ける。</p> <p>表 中晩柑類の予措程度と貯蔵条件の目安</p> <table border="1" data-bbox="475 891 1388 1196"> <thead> <tr> <th rowspan="2">種 類</th> <th rowspan="2">貯蔵区分</th> <th colspan="3">予 措</th> </tr> <tr> <th>減量歩合 (%)</th> <th>温度(℃)</th> <th>湿度 (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">伊予柑</td> <td>短期貯蔵</td> <td>3～5</td> <td>8～9</td> <td>85</td> </tr> <tr> <td>長期貯蔵</td> <td>3～5</td> <td>6～8</td> <td>80～85</td> </tr> <tr> <td>不知火</td> <td>—</td> <td>3～5</td> <td>6～8</td> <td>80～90</td> </tr> <tr> <td>ぽんかん</td> <td>—</td> <td>5～7</td> <td>4～5</td> <td>80</td> </tr> </tbody> </table> <p>開花期が早いうめなどは、できるだけ早くせん定を完了する。落葉果樹では、温暖化の影響で落葉期が遅くなり、せん定適期が従来よりも短縮している傾向がみられる。そして、キウイフルーツは2月上旬以降にせん定すると樹液が流れ出すため、12月中旬頃からせん定を始め、1月下旬までに終了する(写真2)。</p> <p>キウイフルーツの接ぎ木は、樹液の流動が活発になる前に実施すると活着率が高まる。</p> <div data-bbox="906 1272 1375 1594" data-label="Image"> </div> <p>写真2 せん定後のキウイフルーツ</p>	種 類	貯蔵区分	予 措			減量歩合 (%)	温度(℃)	湿度 (%)	伊予柑	短期貯蔵	3～5	8～9	85	長期貯蔵	3～5	6～8	80～85	不知火	—	3～5	6～8	80～90	ぽんかん	—	5～7	4～5	80
種 類	貯蔵区分			予 措																								
		減量歩合 (%)	温度(℃)	湿度 (%)																								
伊予柑	短期貯蔵	3～5	8～9	85																								
	長期貯蔵	3～5	6～8	80～85																								
不知火	—	3～5	6～8	80～90																								
ぽんかん	—	5～7	4～5	80																								

(作成 果樹研究センター)